



TITLE:

大正十一年と天文學

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 大正十一年と天文學. 天界 1921, 2(14): 1-1

ISSUE DATE:

1921-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159653>

RIGHT:

謹 賀 新 年

第 二 卷 大 正 十 一 年 一 月 號

大 正 九 年
創 刊

天 界

第 十 四 號
天 文 同 好 會
發 行

大 正 十 一 年 天 文 學

大正十一年は、火星の接近を以つて記念すべき年である。但し、接近の距離から云へば今年よりは明後年（大正十三年）の方が近く来るのであるが、其の差は僅かであるから、今年の火星學界が活躍すべきは言ふを待たない。既に一昨年の時に於いてさへも、斯界の元老ビケリング教授等は、大シルチス附近に大嵐の起つたことを逸早く發見して世界を驚かした。今年の衝は六月十日で、見える位置は南天スコルピオ星座の近傍であるから、例によつて、北半球の高緯度に在る歐羅巴の觀測者たちには、低く過ぎて御氣の毒であるが、米國や、印度、アフリカあたりの人々には、天氣さへ好ければ、餘り心配なく觀測が出来やうし、殊に南米の諸天文臺は、絶好の位置を占めてゐるから、彼れ等の大活動は單に想像するだけでも吾人の血を湧かせるに足りる——しかし我が日本の位置も火星のためには決して失望すべきものではない。内地に於いてさへも地平線の障害がなければ、五六月頃は、毎夜優に六時間の連續觀測をすることが出来るのは、歐羅巴の同勞者に對して、まことに誇るに足るものである。吾人は此の際、大きな望遠鏡が無いなど、泣き言を言ひたくない。京都の七時、東京の八時、大津の六時半に三百倍以上の倍率をかけるならば、ジャマイカ島の十一時と相應じて、忍耐と熟練により、火星の開拓的研究に若干の貢獻をなすことが出来ると思ふべきものである。濠洲の諸天文臺が振はない今日、歐米米から、適當な間隔を持つてゐる我が日本の位置は、吾々が熱心を以つて保護すべき義務がある——世界的に、（只、願はくは、六月の梅雨が吾人の希望を裏切らないことを。）今年の天文學界に於ける第二の事件は、印度洋に於ける、九月二十一日の皆既日食である。日食は今世紀中、永く日本内地からは縁を絶つてゐる。幸ひに（戰亂の結果）、我國は所謂南洋諸島を管理するに至つたから一九二九年以後には數度の食を彼所に於て觀ることが出来るのは、喜ばしくはない。しかし驟つて思ふに、日食觀測のために遠征することは、遠航至難の昔はいさ知らず、今日の利便多き時代には、百千哩の距離を苦にすべきでない。殊に今回の印度洋上の日食地は、歐よりも、米よりも、まさつて我が日本からの距離を最も便利とする——こゝにも亦、世界のために果たすべき義務が吾人に殘されてゐる。新城博士等が年來高唱せらるゝ太陽研究のために、又、時節柄アインシュタイン問題の解決のため、我が日本の官民有志家が、振つて南海に遠征を試みんことを望むものである。

今年は、實に新天文學の開祖たる大ハーシエルの歿後百年に相當する。獨逸の片田舎に育つた此の素人天文家が、天界の神秘を知らんがために、熱情溢るゝ研究と努力は、先づ天王星の發見に成功し次で重星に、變光星に、或は太陽運動に、宇宙構造に、あらゆる新學を開拓し、「星其れ自身を研究」した偉業は、百年後の今日、既に充分報あられて、吾々の宇宙觀を確立した。今日の學界を顧みる時、吾人はハーシエルの遠眼にくりかへし謝すべきである。今年の記念として、吾々は、素人と専門家の別なく、皆ひさしく、此の際、ハーシエルの人と學とを研究して、大に學ぶ所あらねばならぬ。「天界」は第二卷八月號を期して紀念號となし、此の大偉人の効績を表はし、兼ねて「子ハーシエル（昨年は實に其の歿後正に五十年であつた）及び、妹ハーシエルをも學ばん豫定である。（山本生）